暮らしを変えるバナナ

バナナ村自立開発5ヵ年計画

Why? なぜ、暮らしを変えるのか

人間らしく生きられる社会を自分たちの手で創る

ネグロスの山奥から日本まで、デリケートなバナナをポストハーベスト（薬品処理）無しで、輸入しようという、当初誰もが「気の遠くなるような」不安をもった民衆交易がスタートしたのは一九九〇年。最初はわずか一〇トンではじまったバナナも、二年後の九二年には月一二〇トン、年間にして一五〇〇トン近いバナナが、日本各地の消費者に届けられるようになりました。

スーパーや八百屋でこれまでお馴染みだった多国籍企業のバナナに比べれば、色も形も決して「きれい」じゃないネグロスのバランゴン種。でも、なんともいえない甘い自然の香りと味が、多少高い値段でも消費者の中で評判になりました。

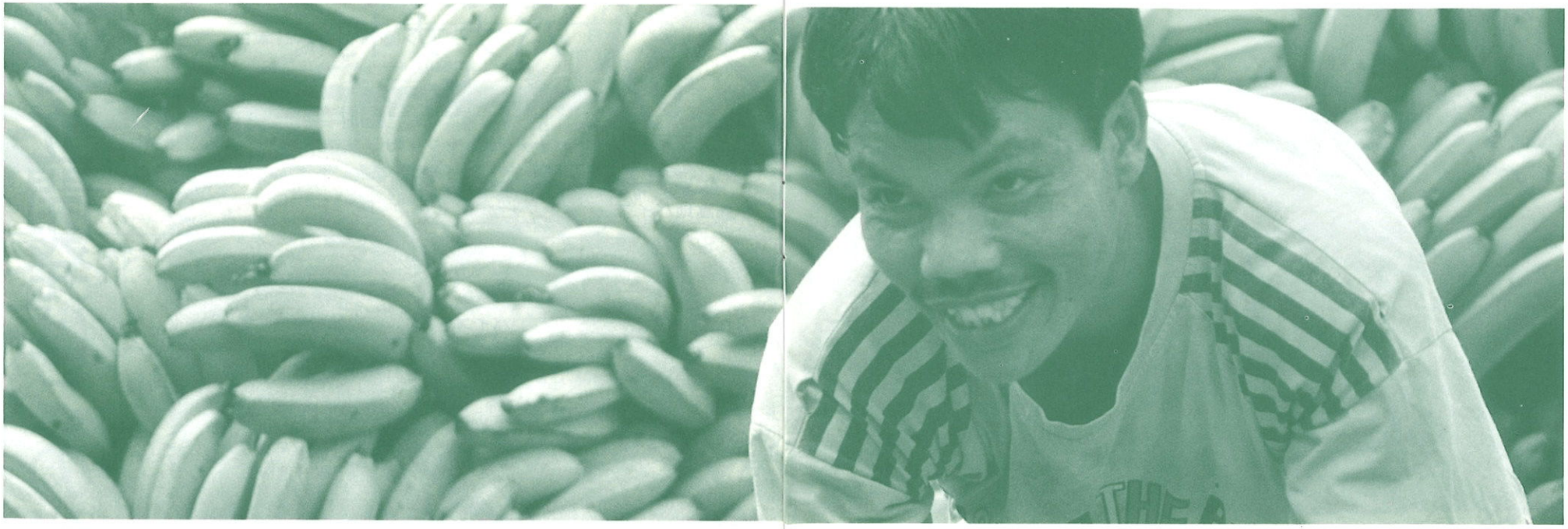
ネグロスのバランゴンバナナがわずか二年の間にこれだけ多数の人々に受け入れられた背景には、単に味が良いというだけではなく、バナナを通じて日本の消費者とネグロスの生産者が直接出会い、共に暮らしを人間らしい方向に変えていきたい、という共通の願いを共有できることに気付いたということがあります。

そもそもこの民衆交易が始まった背景には、何年にもわたるネグロスの人々の自立に向けた闘いがありました。

今から一四〇年前にスペイン植民地下で始まった砂糖キビ栽培は、豊かな島の森も畑もすべてをつぶし、砂糖農園だけがひたすら続く単一作物の島にネグロスを作り変えてしまいました。ネグロス島の大きさは四国の三分の二くらいですが、ネグロス西州では、州人口の七〇％以上が「砂糖」に依存し、しかも人口のわずか二％が全私有地を所有するという構造が、今もなお綿々と続いています。

特に八〇年代初頭に起きた世界的な砂糖価格の暴落で、ネグロスはあっという間に「飢餓に苦しむ島」となってしまいました。しかし、この「絶望」の中から、ネグロスの民衆の自立への模索が始まったのです。いままで何世代も地主の言いなりになってきた生活から自立して、人間らしく生きられる社会を自分たちの力で創り出していこうという試みです。

飢餓を回避するために、自給的な農業づくりを確立する。と同時に、生活に必要な費用を生み出す換金作物をつくっていこうという活動に踏み出そうとしました。しかし、そこでまた、大きな問題にぶつかってしまったのです。



大型台風ルピンの襲来が新たなステップを踏み出すきっかけに

それは、これまで仲買人の意のままになっていた「流通」の問題です。そこで仲買人の中間過程を排除して、生産者、消費者に少しでも多くの利益をもたらしていこう、とネグロスの民衆団体のなかから、「オルター・トレード社」が八九年に設立され、これを受けて日本では「㈱オルター・トレード・ジャパン」が発足しました。

マスコバド糖から始まり、バランゴン種のバナナに発展した民衆交易によって、ネグロスの農民は生産物を正当な価格で出荷できる夢が実現し、収入も増えました。このことは生産者だけでなく、民衆の流通システム全体に関わる人々の生活を助けることにもなったのです。

刈り出されたバナナを箱詰めにする人たちは、地元の砂糖労働者たちです。運搬などを合わせると、一回の出荷で六〇〇以上の家族が利益を受けることになりました。

一方日本では、無農薬バナナを通じて消費者がネグロス民衆と直接交流し、「北」と「南」の民衆同士が、どうすれば共に生きられるかという問題に、様々な場所で取り組むことになりました。

ネグロスではこの新しい事業を「バナナ作戦」と名づけました。

しかし、ようやく軌道に乗り出した矢先の九〇年一一月。超大型台風ルピンがネグロスを襲い、バナナの生産地であるラ・グランハ地域の村々では、家も畑も壊滅してしまったのです。しかし、生産者たちは大被害にうちひしがれるのではなく、そこから立ち直るために、これまで粗放的な農業しかやってこなかったことを全面的に見直したいと考えました。そこで持ち上がったのが、「バナナ村自立開発五ヵ年計画」。

いわゆる「ムラおこし・地域おこし」です。自給的でお金のかからない農業に計画的に取り組み、さらには、地域に保健・医療や識字・算数を普及する人材を養成し、村の生活全体を改善する。しかもそのための資金を外部に頼るのではなく、自分たちの生産するバナナの売上から捻出していく。文字通り自前の資金で運営を目指そうというものです。

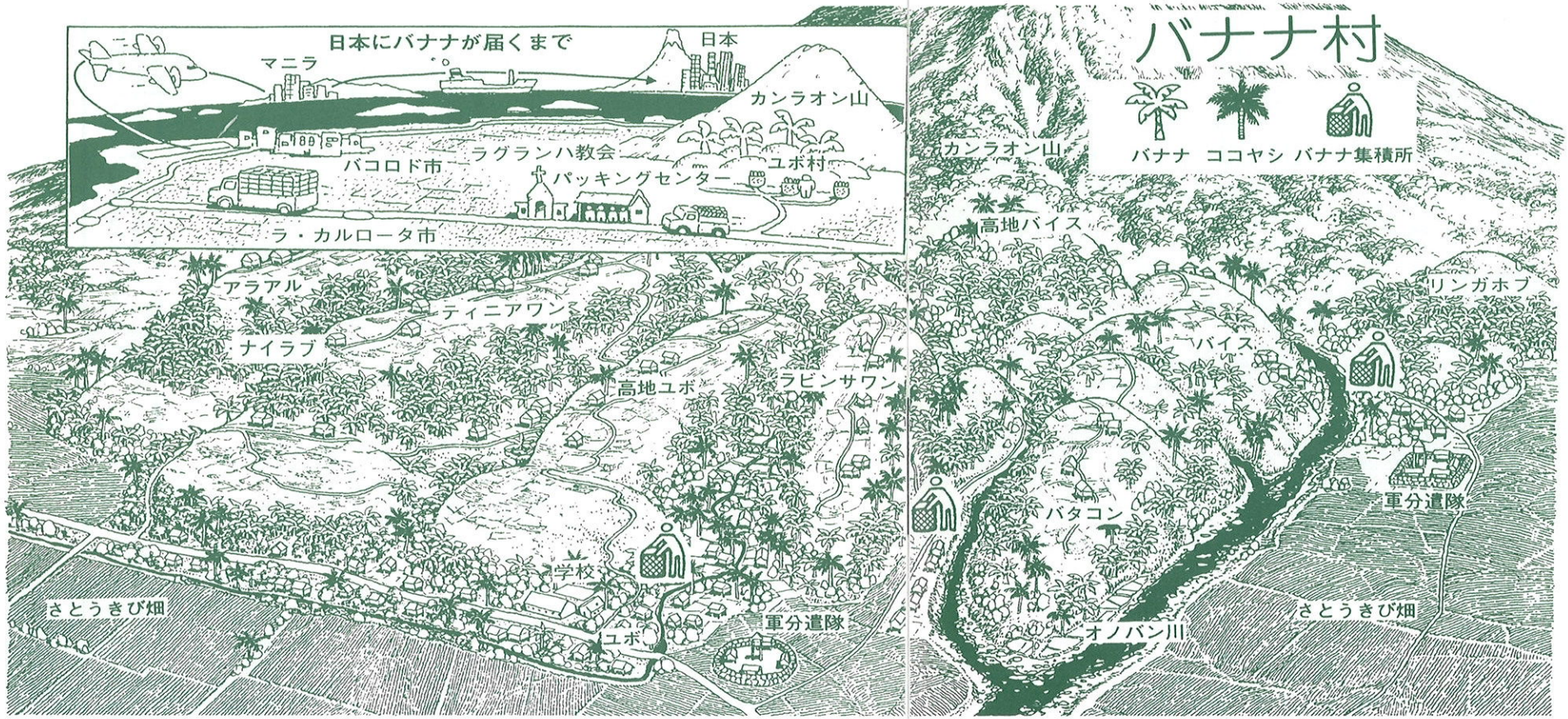
こうした試みを成功させるには、共同体のわかちあい、相互扶助がなによりも大切になってきます。

「五ヵ年計画」では、経済的自立を達成するだけではなく、生産者などの協同組合づくりや農作物の流通を介した都市の消費者との連携など統合的な組織づくりを目指しています。

さらに、バナナから得る資金をもとに、農民による信用組合を計画するなど、これまでの歴史を自分たちの手でつくりかえていこうという、全く新しい自立への試みが構想されています。

Where?

自立開発はこの村々から始まる



五ヵ年計画の対象となる地区は、西ネグロスの州都バコロドから約六〇km離れたラ・カルロータ市の山間地にあります。ユボ村のティニアワン、ラビンサワン、バタコン、バイス、リンガホブの各地区とアラアル村のナイラブ地区の合計六カ所。ここに住む約四〇〇家族が計画実現の担い手になります。

これらの地区は、どこも斜面が多いため耕作面積が狭く、しかも土地は痩せています。そこにさつまいも、キャッサバ、コーヒー、ピーナッツ、米、トウモロコシ、バナナを細々と栽培し、その作物を生活の糧として生きてきました。さて、ここでいくつかの地区について簡単に触れておきましょう。

◆ティニアワンは「はっきり、くっきり」

ユボ村のなかで最も高地にある。かつては森林に覆われ、急斜面が低地からくっきりみえたことから、今の地名がついた。第二次大戦中、農民は山の上から日本軍の動きを見ていたという。三四家族、二〇〇人が住む。月平均収入は三〇〇～三五〇ペソ。

◆ラビンサワンは「光輝く鏡」

急勾配のこの土地も、太陽の光があたるとキラキラと輝いてみえるためこの地名がついた。水の便が悪く、三〇〇メートル離れた川から補給。三六家族二一六人が住む。現金収入はバナナ以外は炭焼き。小学校は、一〇km離れたユボ村にあるため、子供たちはほとんど学校に通えず、大人と一緒に農作業や家事をする。月平均収入七〇〇ペソ。

◆バイスは「論争する」

バイスの一部は国立公園で、残りは農民が土地の権利証書をとっている。スペイン植民地時代にも森林のためか侵略の手を逃れて平和に暮らしていたが、後に低地の人間が移り住んでくるようになり、彼らの土地を脅かし始めたので土地の権利を「論争して」（バイス＝論争）守ったという。焼き畑農業がさかん。小学校はひとつあるが、医療サービスはない。伝統的な灌漑設備をもち、水の便は良い。六七家族、三九五人。月平均収入は五〇〇～六〇〇ペソ。

◆ナイラブは「あなたに恋をした」

昔、ある狩人がこの地にやってきて美しい娘に出会い恋をしたことからこの地名が。ラ・カルロータ市街から一四km離れたアラアル村の地区のひとつで八五%は傾斜地。月平均収入は一〇〇〇ペソ。バヤニハンと呼ばれる伝統的な「結い」制度が残っている。

Who?

計画の担い手はバナナを作る農民たち

五ヵ年計画は、バランゴン生産者協会（BGA）を中心にネグロスの五つの民衆団体（NGO）が調整委員会を作って実施しています。というのもBGAはまだ生まれたばかりで、組織運営や財政管理の方法については未経験だからです。そこで、五つのNGOではプロジェクト支援チーム（PAT）を結成。それぞれのチームが農業技術の指導、災害予防、共同体の意識化、医療、協同組合の組織化などについて支援すると同時に、実際の現場で生産者とともに働いています。五年後にはBGAが自主運営できるようになることが目標です。

バランゴン生産者協会（BGA）

「民衆交易の最終的な目標は、地域全体を豊かにし、個々の農民たちが真に人間らしい生活を送ることができるようにすることである。そのために、私たちは交易の収入を共同体で管理し、農業をおこしていかなければならない」。

九一年七月三〇日。はじめての農民組合・BGAはこのような目的で誕生しました。メンバーは現在、五ヵ年計画の対象地を中心に約三〇〇人。執行委員は六名です。支部は一〇カ所。それぞれに六人から七人の役員を配置し、社会経済、組織、財政などの委員会を作っています。役員の半数以上はお母さんたちで、現在も委員長、副委員長は女性。役員は毎年の総会で選出されます。

五ヵ年計画では、BGAが独自で組織運営できるまでに成長することを支援し、さらにその経験を外に伝えていくことも目的としています。ちなみに、役員は全員五ヵ年計画の責任者です。

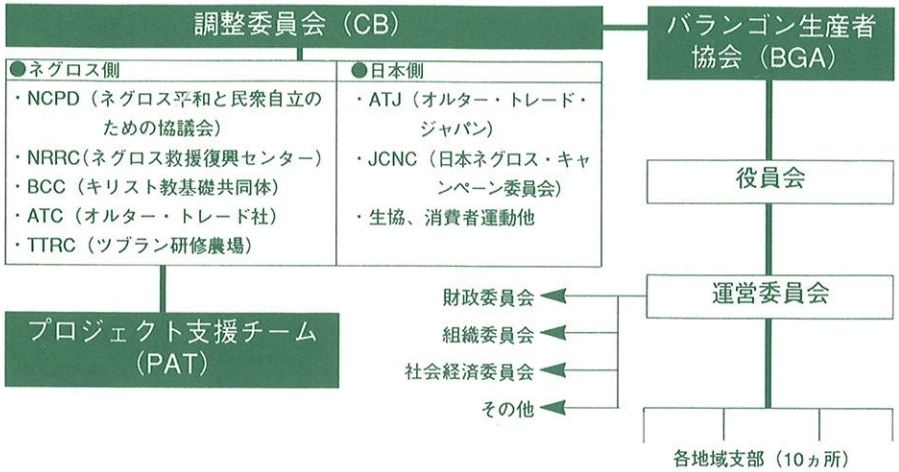
九一年の設立大会は、大型台風ルビンの被害から立ち直ろうと必死だった真っ最中にラ・グランハの教会で行われました。生産者三〇〇人が礼拝堂を一杯にし、お祝いのレチョン（豚の丸焼き）も用意され、希望にみちあふれた集まりでした。

現在、メンバーをさらに拡大していくために、役員のお母さんたちは毎日村々を一日がかりで訪ね歩き、農民たちとの真剣な話し合いを続けています。

キリスト教基礎共同体（BCC）

BGA設立の過程では、キリスト教基礎共同体（BCC）の役割がとても重要なものとなりました。生産者協会ができる前から山の農民はBCCのメンバーであり、さまざまな活動を通して、

5ヵ年計画実行のための仕組み



NCPD（ネグロス平和と民衆自立のための協議会。5ヵ年計画全体のまとめ役。）
NRRC（ネグロス救援復興センター。復興プロジェクト＝食糧生産、農機具配給、災害予防訓練など。）
BCC（キリスト教基礎共同体。共同体の価値観、意識変革の場をつくる。）
ATC（オルター・トレード社。バナナの流通を助け、生産拡大の技術指導を行なう。）
TTRC（ツブラン研修農場。持続発展の農業の実践指導をする。）

「わかちあい」を実践していたからです。

BCCの活動の基本は「今日の社会には構造的不正義が存在し、そのことで多数の人々が貧しい暮らしを強いられている。しかし、すべての人々は現世において、神に祝福されるべきである。したがって教会は貧者の側に立ち、社会の変容を促していく」という考え方です。ラ・グランハのBCCの活動は八〇年代に入ってから、砂糖労働者や山の農民の間でひろがりました。

現在バナナの選別、買い取り、パッキングセンターでの洗浄、箱詰めを一手に担っているのは、このBCCのメンバーです。洗浄・箱詰めには約二五〇家族がかかわっています。

ラ・グランハのBCCは八つのゾーンを組織し、それぞれに委員会をつくっています。活動は多岐にわたり、平等や人権意識を学ぶ教育活動、民衆自身が行う宗教活動などで、バナナ・プロジェクトは社会・経済委員会が引き受けています。各地区には、母親グループ、父親グループ、青年グループがあり、家族ぐるみの共同体活動を展開しています。

What? 五年後に暮らしはこう変わる

五ヵ年計画の期間は、一九九一年五月から九六年五月まで。五年後の目標に向けて、今着々と実施計画が練り上げられています。それは大きく分けると次の三つに集約されます。

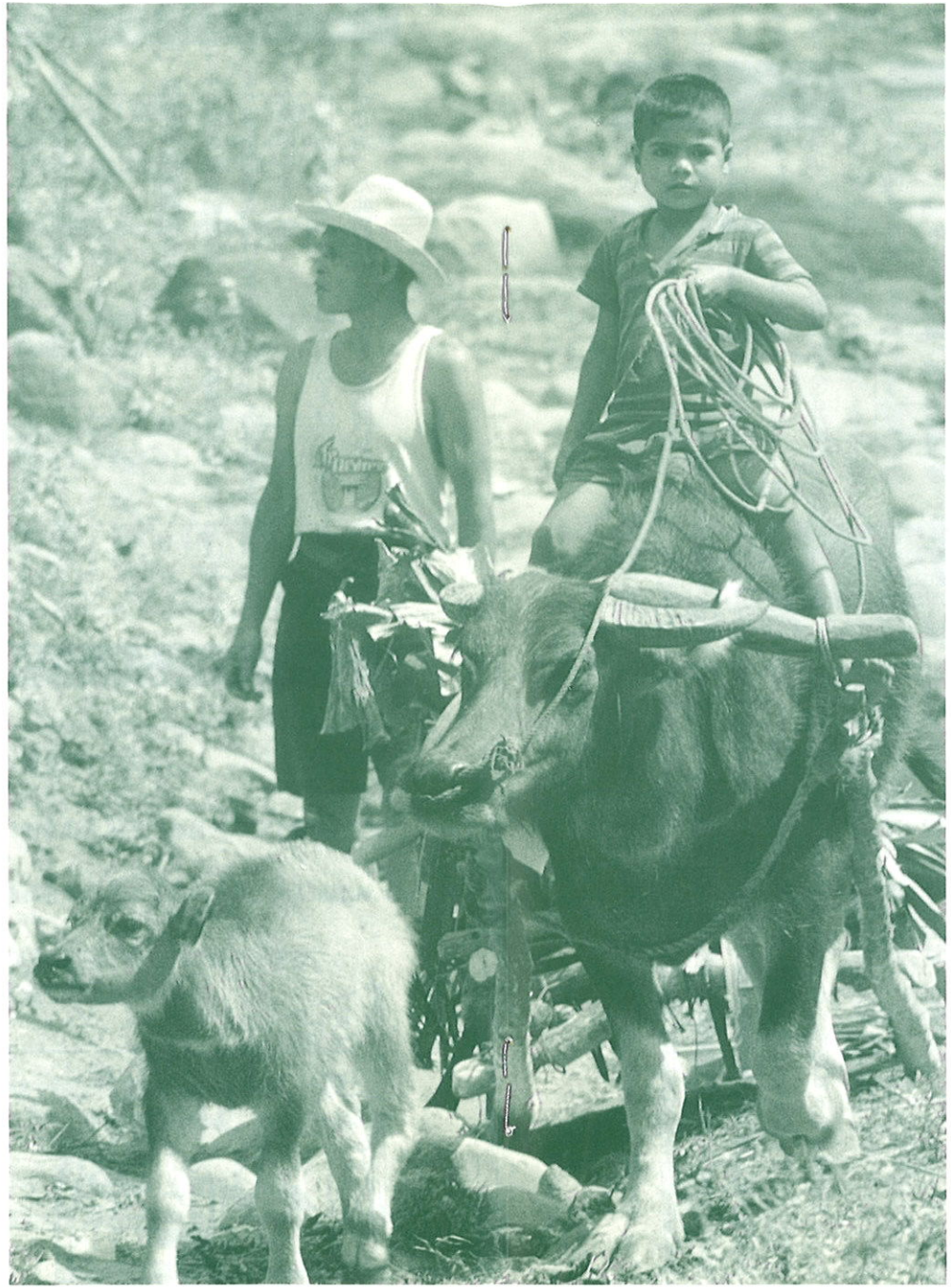
(一) 生きるための農業

生きるための農業、つまり自給自足できる農業を目指します。これまではただ適当に植えていたバナナを計画的に育てて、品質を向上させ余裕をもって出荷の調整を計れるようにします。また、ただトウモロコシやピーナッツを蒔いていただけの斜面に段々畑を作り、様々な野菜や果樹を育てること、土砂崩れを防ぐための植林や灌漑設備を整えることなど、総合的な農業、しかもお金のかからない有機農業に取り組みます。まず九二年度から九三年度にかけては、やせた土壌を豊かにし、生産性を高めるための農業の基礎づくりに力をいれ、野菜栽培を開始します。

野菜の出荷に関しては、仲買人を通さずオルター・トレード社を通じて、都市貧民組織に作物を卸すなど自前の島内流通を作り上げようとしています。

その一方で、農民として生きることの誇りや自信をとり戻していこうというのが、この「五ヵ年計画」の重要な点です。なぜ、あえて農民に農民としての意識を問いかけるのか。土地はいつの時代もそれを耕す農民のものではなく、バナナ村の農民たちも日々のご飯をたべるためには砂糖農園へ働きに行かざるを得ませんでした。地主からは「草一本もとってはならない」と教えられ続けて、その結果、土を愛し、自由に農業で生きる経験を長いあいだ奪われてきたからです。

「五ヵ年計画」には土地を取り戻すための活動も含まれています。バナナ産地は国有地か、すでに地主が放棄した土地です。政府の農地改革の対象になる土地も多くあるにも関わらず、行政の手は全くここには及んでいません。しかし、農民は数世代ここに生きてきたのです。現在、こうした土地の証書を地主や農地改革省との交渉や運動を通じて取り戻し、名実ともに土地とともに生きる農民になることを目指しています。



(二) 教育・保健活動

農業生産と同時に農民の学習活動にも力を入れています。

各村とも小学校は少なく、子どもたちは五km、場所によっては一〇kmも離れた学校まで歩いて通わなくてはなりません。ほとんどの家では、九才からは立派な労働力となり、家事や畑仕事をし

て両親を助けています。でもどの親にも子どもにはせめて高校まで進学させてやりたいという強い希望があります。また、小学校も卒業することのできなかった大人たちは、算数などの学習が必要です。生産者協会がバナナの収益を共同で管理し、運営するためにも。

一方、医療については、フィリピンの医療制度は米国をモデルにしており、とにかくお金がかかります。診察料だけでも一五〇ペソから二〇〇ペソも支払わなければなりません。しかも農村にはほとんど医者はいません。そこで低料金で安心してかかれる民間医療―薬草やハリ治療―を活用した自前の医療体制をつくることが必要になってきます。さらに野菜やたんぱく質を充分にとるような食生活の改善もすすめます。

これらを実現するために、九三年度までに農民のなかから、識字・算数を教える補助教員を一八名、同じく一八名の医療ワーカーを養成することになっています。

(三) 統合的な協同組合づくり

五ヵ年計画の最終的目標は、農民の経済的自立だけではありません。また経済的自立だけを求めては、この計画を実現させることはできないのです。

それでは何が必要なのか。結論からいえば、地域の人々が有機的につながりあった共同体です。人々が協同し合ってはじめて、この計画は動きだし、描いた未来を現実のものとして獲得できるのです。とくに、この計画では外からの援助に頼らずに、バナナを売ることによって得た自前の資金を使っていくのですから、よりいっそうしっかりとした共同体が求められます。

そこで、九一年には、はじめての農民組織バランゴン生産者協会（ＢＧＡ）が誕生しました。今後は、バナナからの収益を共同で管理し、運営していくための信用組合も必要となるでしょう。

また、民衆の流通システムに加え、生産者たちのつくった作物を売る人と、それを買う人との間にも新たな関係をつくっていきたいと考えています。そして、さらには、生産者、流通、消費者、民衆銀行のような信用組合が、統合的にむすびついた新しい協同組合づくりを目指しています。

バナナ村の人々の今の暮らしは？

収入	月平均収入は５００－６００ペソ（１家族約７人）。政府の出した農業労働者の最低賃金は一日７８ペソ＝２３４０ペソ／月）。現金収入は、バナナ以外は炭焼き、コーヒー。
教育	小学校が遠いところで５～10km離れている。授業も午前中は低学年、午後は高学年と半日しかない。
医療	いずれも15km離れたラ・カルロータ市まで行かなくてはならない。村には助産婦以外は医療にたずさわる人はほとんどいない。
食事	１日３回コメの飯をとることは少ない。芋類やトウモロコシも主食にする。自給できる充分な野菜やたんぱく質源がない。
災害	自然災害（台風、旱魃、土砂崩れ）と人的災害（軍事化）による被害が大きい。

注（１ペソ=5円）

５年後に目指す暮らしは？

●農民の生活

食料　１日に３度の充分でバランスのとれた食事ができること。

衣服　年間３セットのあたらしい服を買えること。

住居　より頑丈な材質の家にする。災害でこわされた場合でも自分たちで修復ができるようにする。

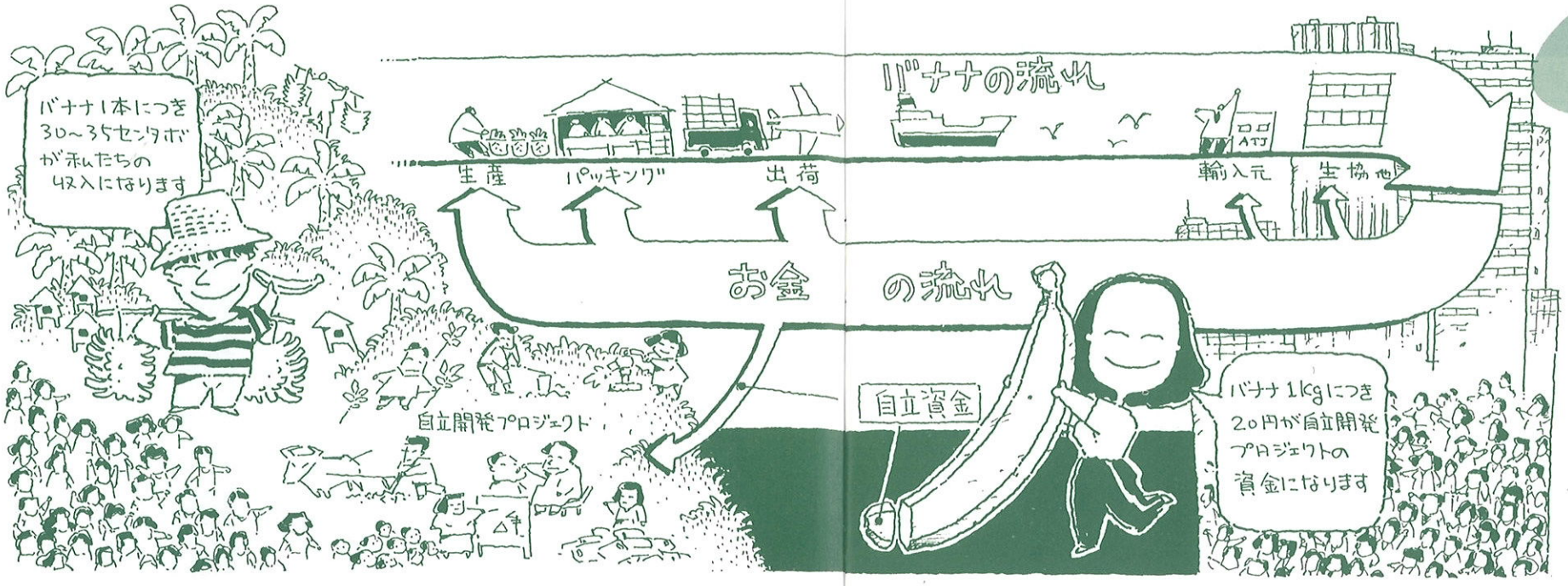
教育　子どもたちをすくなくとも高校まで通わせることができること。大人は読み、書き、算数ができるようになる。

医療　発生率の高い病気については、地域の医療担当が有効的に対処できること。必要時には、病院にかかれるだけのお金を調達できること。

●地域の生活

1）ＢＧＡがＮＧＯの手を借りなくても、組織や財政の運営が出来るようになること。
2）民衆交易で得た資金で農民の信用組合ができ、生産者、消費者、流通、金融の統合型協同組合が生まれる。
3）各地に医療や算数・識字教育のアニメーター（準教員）が養成される。
4）耕作可能な土地を１００％利用する農業生産と自給ができる。
5）４～６歳児のための保育所ができる。

How? 新しく変える「北」と「南」の関係



オルター・トレードを通して送られてくるバランゴンバナナは、生産者や箱詰め作業に携わる人々の労働に対して適正な金額を支払っているため、市販の多国籍企業のバナナより値段が三倍ほど高くなっています。生産者たちの収入はこれまでの二倍〜三倍に増え、子どもたちの教育費や食費に少し余裕が生まれました。

消費者が支払うバナナの代金のなかに、一キロにつき二〇円の「自立資金」というものが含まれています。この資金は、当初の民衆交易の立ち上がり時期には、トラックの購入、箱詰めセンターの建設などの設備のために使われました。現在は「五ヵ年計画」の実施に運用されています。

九二年度からは、月平均一二〇トンのバナナ輸入が見込まれています。予定通りに一二〇トン体制になれば、月二〇〇万円以上の資金が生まれることになります。この資金が地域おこしの大切な糧となっていくのです。農業の基盤づくり、識字・算数の学習、協同組合づくりに向けての組織化、民間医療のワーカー養成、農産物の島内流通システムづくりなどなど、九二年から九六年に向けての活動が展開していきます。同時にこの資金を使い果たすのではなく、将来の民衆銀行づくりに向けた貯金もはじまります。

「五ヵ年計画」はバランゴン生産者協会（BGA）が主体となってバナナ村をひとつのモデル地域として進められますが、これが成功していけば、自給的農業→換金作物の民衆流通→統合的な協同組合→自らの資金運営といった新しい自立への挑戦がネグロス各地、さらにはフィリピン各地へと拡大していくことでしょう。

近年、日本の政府開発援助（ODA）のありかたについて、多くの疑問が叫ばれてきました。一件あたり、何一〇億、何一〇〇億という巨額の援助金が、「開発」「発展」という名のもとで、自然を破壊し、住民を追い出す結果を招いてきたからです。「五ヵ年計画」は、こうした上と外から押しつけられる「開発」を拒否し、「援助する」「援助される」という関係をガラリと変えていくモデルです。

日本に住む私たちは、バナナを通してネグロスと向き合うことで、「北」と「南」の民衆同士がどうやって共に生きることができるのかを問い返してきました。ネグロスの民衆の「暮らしを変えること」への挑戦は、日本の私たちにとっても、これまでとは違う暮らし、社会を作っていくことにつながっていくのです。

JCNC

ネグロス島への支援の歩み

援助からわかちあいへ

私たち日本ネグロス・キャンペーン委員会が「ネグロス」と出会ったのは一九八五年の末のことでした。八〇年代に始まった国際砂糖価格の暴落がネグロスを直撃し、一五万人以上の子供たちが飢餓に襲われ、その子供たちに食糧や医薬品を配布する救援活動に協力することになったからです。

ネグロスはフィリピン最大の砂糖生産地ですが、しかしフィリピンの砂糖生産地はネグロスだけではありません。しかも旱魃などで農作物が壊滅したわけでもなく、砂糖の国際価格が暴落しただけなのに、なぜネグロスでは子供たちが飢餓で死ななくてはならないのか。余りにも理不尽ではないか。このことがネグロスと出会った私たちの最初の驚きでした。

ネグロスの多くの人々は、一世紀半にわたって広大な砂糖農園の労働者として、自分たちの食糧を作ることも許されず、朝から晩まで厳しい労働条件と低賃金で酷使されてきました。それでさえ、ギリギリの生活を送っていたのに、砂糖価格の暴落で、人々は解雇され収入の道を閉ざされてしまいました。これが飢餓の原因でした。さらには、反政府ゲリラと政府軍や地主たちの私兵との衝突も貧困に拍車をかけました。大規模な軍事作戦などによって村を捨てざるを得なくなった人々は六万人以上。村を追われた人々は一から生活の建直しをしなければなりません。

ネグロスの人々が貧困を克服するには、救援活動による食料や医薬品を受け取って、どうにかその場をしのいでいくだけでは不可能です。農園労働者や村を失った人々は何とかして土地を確保しなくてはなりません。そして自分たちの生活に必要な食糧を生産したり、医者にかかったり子供を学校に通わせるための現金収入を得る、つまり自立自給活動を進めなくては問題は解決しません。零細農民にとってもまったく同じことがいえます。

しかし、ほんの僅かな人が土地・経済・政治のすべてを支配しているなかで、その支配構造を変えることにつながっていく自立自給活動を実現することは、到底不可能に思えました。それでもネグロスの人々は、この砂糖危機をきっかけにして、それに果敢に挑戦し始めたのです。私たちにはそれが次の驚きでした。

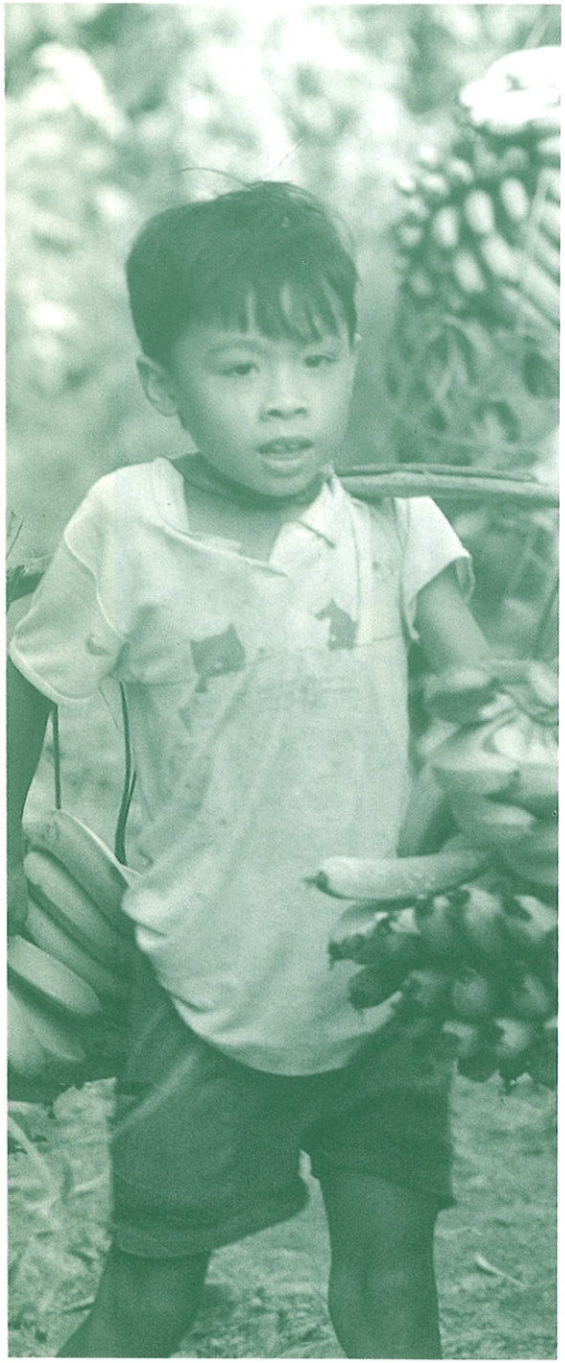
まず緊急救援の次に必要になったのは、最低限の自給食糧を確保するための稲や野菜・果樹のなどの「共同耕作」をはじめとする、地域単位の小さな「復興プロジェクト」の実施でした。

その共同耕作を実施するための開墾や、田畑を耕すために必要な水牛を配布することも重要な支援です。さらに、共同耕作などの自給活動をより発展させるには、その地域に合った農業技術を学んだり、種苗を育成したり、また識字算数学級、保健衛生などの学習・研修プロジェクトの実施が重要です。そのためのセンターとして「ツブラン研修農場」が一九八七年に設立されました。

こうして自給用の作物を育てていくと共に、さらに生活必需品の購入や医療・教育などに必要な現金を得るためには換金作物の栽培が必要です。しかし今までは、換金作物を適正な価格で売り、また他の食料や衣服などの生活必需品を安く手に入れることは、流通システムを少数の商人や仲買人に独占されていてできませんでした。その重要な流通部門を民衆のものにするために開始されたのが「民衆交易」活動です。

このように展開してきた緊急救援、復興プロジェクト、学習・研修プロジェクト、そして民衆交易の各活動を統合的に進めていくことが、自立自給活動を成功させていくことだとわかってきました。それを実際に一つの地域で実施しようというのが「バナナ村自立開発五カ年計画」なのです。

（日本ネグロス・キャンペーン委員会　秋山眞兄）



ビデオ　　制作オルター・トレード・ジャパン

「バランゴンとバナナ村の人々」

VHS27分 販売価格1500円 [バナナくらぶ会員1300円] +（送料360円）

私たちの食卓に届けられるネグロスのバナナはどのような人々の手を通して運ばれて来るのでしょうか。

バナナを刈り取る人、60キロ以上もあるカゴをかついで山を下りる人、水洗い、箱詰めをする人……1回の出荷に600家族がかかわり、その人々の手作業を通してバランゴンは日本にやってくるのです。この全工程を収録したビデオが完成しました！

「以前は現金収入がなかったので芋しか食べられませんでした。今はバナナを売ったお金で米を買い、日に3度食べることができるようになりました」

バランゴン生産者はこう語ります。

このビデオは、バナナ村に生きる人々の声を通して、バナナの民衆交易が、地域の人々の生活をどう変えていったのかを伝えます。

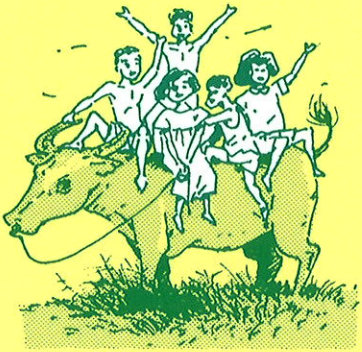
ネグロスのことがわかるおすすめブックレット3冊！

- 「台所からアジアを見よう－バナナ」（発行：ATJ）　定価４００円
- 「顔の見える国際協力 －フィリピン・ネグロス島の人々と共に」（発行：JCNC）　定価５００円
- 「国内難民－村を追われる人々」（発行：JCNC）　定価４００円

暮らしを変えるバナナ

1992年６月15日　発行

オルター・トレード・ジャパン（ATJ）
日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）
〒169　東京都新宿区西早稲田 3-9-6ＫＴビル
☎03（5273）8163
FAX03（5273）8162
※この本の内容についてのお問い合わせは、
オルター・トレード・ジャパン　バナナ村自立開発５カ年計画デスク
大橋成子まで。



㈱オルター・トレード・ジャパン（ATJ）
日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）
〒169 東京都新宿区西早稲田3-9-6 KTビル
TEL. 03(5273)8163